交流人口1000万人時代の日韓関係

韓国観光公社
鄭 昌洙社長に聞く
インタビュアー　本社・積田朋子社長

日本と韓国の観光交流は、2015年に国交正常化50周年を迎えるなど、重層的で未来志向の協力を進めている。日韓の交流人口は、10年に500万人を突破し、16年には739万人が往来。目標とする1千万人も目前となった。17年6月には、日韓観光・経済交流団360人が全羅南道の木浦を訪れるなどの交流が実施された。18年は韓国の平昌で冬季五輪・パラリンピックが開催され、双方向交流の気運が一段と盛り上がりそうだ。韓国では現在、平昌五輪を控えて鉄道や道路、施設の整備が進んでいる。そこで観光経済新聞では、平昌冬季五輪・パラリンピックの開催を「観光・スポーツ交流元年」にしようと、韓国の観光開発を推進している韓国観光公社（韓国・ソウル市）を訪れ、日韓観光交流の現状、今後の交流拡大への取り組みの方向性などについて同社の鄭昌洙（チョン・チャンス）社長に単独インタビューを行った。

「平昌冬季五輪・パラリンピックの開催準備は進んでいる」と鄭社長

平昌五輪が契機
相互交流に弾み

積田　2018年2月、平昌五輪・パラリンピックを控え、いろいろな施設の準備で韓国の観光も変わろうとしているが、観光政策を踏まえながら今の韓日交流における課題、進路をお聞きしたい。

鄭　前の韓国の政府の時代は難しいときもあったが、文在寅政権では韓日の友好関係を進めたい。観光協会も含め関係業界が難しい時期を迎えており、観光産業の発達に役に立っている。韓日関係が持続的に発展するには、交流人口の割合がかたよってはいけない。

積田　韓国と日本は歴史、文化など相通じることが多い。観光交流も昨年739万人となった。観光交流人口1千万人の目標を掲げているが、達成するには何が必要だろうか。

鄭　たぶん今年中に1千万人は達成できるのではないか。1～4月までのデータでは、訪韓した日本人観光客が約78万人、日本を訪れた韓国人が約220万人で、すでに300万人を超えている。韓国人が日本に多く訪れていることについて韓国観光公社の社長としてうれしく思っている。今は、日本を訪れた韓国人が韓国内の観光産業の改善点について声を挙げてくれている。今後、日本からの訪韓が増えていくために観光経済新聞でも交流を促していく。

鄭　16年はじめに初めて二階幹事長に会って、韓日の発展のために何が必要かと聞かれた。その時は、日本のメディアは客観的ではないと答えた。当時の韓日での懇談会で「韓国に行くと危ないのではないか」などの意見が多くあった。日本国内では「この時期は危ない」、韓国国内でも「良くない雰囲気」という報道も多くありショックを受けていた。実際には、歴史や領土に関する問題の報道はあるが、韓国人が日本人に対しての悪い感情や報道はまったくない。街を歩いていても、韓国人は日本人観光客を見て、親切であり優しいところにとても良い感情やイメージを持っている。

積田　このような時期にこそ観光が必要。「観光は平和へのパスポート」と言われるように、互いの国の歴史、文化を知りあうことは長い目で見るとさまざまな相乗効果を生むのではないだろうか。来年に開催される平昌五輪・パラリンピックを契機に「観光・スポーツ交流元年」をテーマとし韓日交流に弾みをつけたいと思っているが、観光とスポーツの結び付きについては進んでいるのか。

鄭　韓国では観光とスポーツが連携している。オリンピック組織委員会、江原道、韓国観光公社が一緒になり、平昌五輪・パラリンピックの成功のために努力している。チケットを販売する組織委員会は、ただ競技を見るだけでなく、周りの観光ルート開発や旅行会社と連携して観光ツアーの販売に取り組んでいる。江原道にはインフラがまだ不足しているが、今は着々と開発を進めている。ほかに、外国語に対応できるようにボランティアの募集も行っている。

積田　多くの韓国人は都市を訪れる人が多いが、日本の温泉地にも訪れてほしい。韓国と日本の文化は似ていると思う。韓国のオンドル（床暖房）と日本の畳文化は共通点が多く安らぐと思う。

鄭　私は小さい頃は畳で生活をしていた。冬は寒いので、お湯を入れたボトルを布団に先に入れて温めていた。お風呂も日本式で薪を使っていた。文化は似ているし安らぐと思う。私も日本の温泉にはよく行き、とても良かったと覚えている。

Imagine your Korea

「観光・スポーツ元年」

積田　日本の自治体、団体、企業など観光関係者に期待すること、連携できることはないだろうか。

鄭　世界の観光客の流れとしてヨーロッパが減り、東北アジアが増えている。観光客の過去10年間における1年あたりの増加率は、ヨーロッパ3%、東北アジアは6・6%と約2倍増えている。増加率を上げるために努力は必要だが、東北アジアでは19年はラグビーワールドカップ、20年に東京五輪・パラリンピック、22年に北京五輪・パラリンピックとスポーツのメガイベントが続く。アジア地域で隣の国で開催されることで「観光ベルト」を形成し、欧米などいろいろな国から観光客を呼ぶ良い機会だと思う。韓日中など隣国が連携し、ヨーロッパを超える地域を目指したい。例えば、観光ベルトを利用してラグビーワールドカップや東京五輪・パラリンピックに大勢の観光客が世界から来て、帰り道には韓国にも寄ってもらうことができると良いと思う。

積田　韓日だけでなく、世界の人が観光の際に両国を訪れるようにならなければいけない。

鄭　韓国側から日本人を受け入れる態勢を着々と準備している。今まではソウル、釜山、済州などは多くの人が訪れたと思う。15年から韓国観光公社で準備しているのは、百済の歴史関係の地域や江原道、全羅南道など、地方の魅力ある観光地を中心とした旅行商品を開発している。現在はQRコードを活用した通訳、精算などのシステムを開発しており、今年11月からは実際に利用ができるようになる。このような便利なツールを活用できる旅行商品も今後発表していく。

積田　海外旅行はよその文化を知り、また学ぶことが大切だ。特に若者、女子旅、修学旅行の双方向の旅行が多くなれば、真の友好関係が築くことができ、韓国と日本の交流の拡大が図れるのではないだろうか。

鄭　修学旅行など青少年交流は大事だと思う。韓日では多くの姉妹協定やホームステイなども多くあったが、12年の竹島問題から減ったときがあった。過去に和歌山の学園の理事長から、「子どもたちが韓国に行くのが恐ろしい」と言っていると聞いて驚いた。実際に韓国の国民の感情としては悪い感情はないと訴えたい。女性には、エステや化粧品のショッピング、伝統市場での食体験、韓流イベントなどを商品として作り、インターネットでのイベントも開催している。現在、日本では、朝鮮危機の報道が過熱しているが、韓国内では何も起こってないし、悪い雰囲気を払拭できるように努力したい。私が日本でPRをするたびに成功させなければならない。

鄭　ぜひ、平昌五輪・パラリンピックのある来年は、希望として日本から500万人は来てほしい。「難しいときに手伝ってあげるのが本当の友達」だと思っている。熊本地震のとき韓国からは応援ツアーで日本に行き、麗水万博のときなどには日本から韓国へ多くの人に来てもらった。今は、韓国と中国の関係が完璧な状態でない。日本会（JATA）、全国旅行業協会（ANTA）が共同で韓国と日本の都市などを巡る観光商品の造成を進めている。今後は、欧米に対して一緒に観光商品を売り込んでいきたい。

スポーツ振興で連携
「観光ベルト」形成

積田　ほかに、韓国観光公社として日本でのプロモーションの予定はあるのか。

鄭　韓国観光公社の取り組みとして、日本は羽田空港国際線、韓国は金浦空港で広報館を展開している。今後は大阪、京都、九州、北海道などの場所で広報活動を展開していきたい。

積田　最後に、日本は25年に大阪万博の開催地として立候補している。韓日が一緒に協力して開催ができればと思うが、どうお考えか。

鄭　韓国文化体育観光部は全面的に支援すると言っている。韓国観光公社でももちろん支援していく。二階幹事長が麗水万博で多くの日本人を連れて来られたように、多くの韓国人を日本に連れていきたい。

日韓の観光交流は増えていくと語る鄭社長（右）
（韓国・ソウル市の韓国観光公社ソウルセンターで）

観光業界の発展を誓う鄭社長（左）と積田本社社長